

---

# 彼の瞳に映る世界

屋上の劫火

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼の瞳に映る世界

### 【Nコード】

N8780I

### 【作者名】

屋上の劫火

### 【あらすじ】

永遠の命を持ち、世界を渡り続ける少年と少女達の物語。

主人公最強ものです。

## プロローグ

爆音がそこらじゅうに鳴り響く。  
数え切れないほどの人と異形がぶつかり合っているのだ。

異形は凄まじい咆哮をあげながら大量の人間を食らってゆく。  
逆に人間は頭上に剣を掲げ凄まじい雄たけびを上げながら次々に異形を切り刻んでゆく。

次々に人が死に、  
次々に異形が死んでゆく。

正に地獄絵図。

その状況を遥か上空から見下ろす一人の少年がいた。

その状況を眺めながら少年は、  
「はぁ………」。

「やっぱりこうなっちゃったか………」。  
と、呆れたように呟いた。

「もうこの世界もおわりだなぁ………」。  
そろそろこの世界も飽きてきたし次の世界にいくとしよう  
かな。」

少年がそう言った刹那、少年の目の前の虚空に穴が開き、  
少年は、その穴の中に足を踏み入れていった。

ふと、少年は穴の中に踏み入れていた足を一旦止め後ろを振り返りながら一言

「まあ……せいぜい頑張りなよ……人間。」

そう言って少年はまた歩き出し穴の中に消えていった。

## プロローグ（後書き）

始めまして屋上の劫火と申します。

今回が初投稿です。これからもどつぞよろしくお願ひします。

## 主人公設定

主人公 シヴァ・アレース・ジ・カイン

性別 男

髪 黒

目 両方黒

身長 170cm

年齢 軽く二万は超えている。

―性格―

いたって温厚。

―備考―

・戦争が嫌い。

・今まで数百の世界を渡っている。

・運がない。

・人の事を軽蔑するような人間は嫌い。

―魔力―

ほぼ無限

―戦闘スタイル―

数々の魔眼を駆使して戦う。

―固有スキル―

直死の魔眼

呪殺の魔眼

死神の眼

邪眼

石蠟具眼

アーカードの眼

サイクロップスの眼

狂気の瞳

妖精眼

歪曲の魔眼

劫の眼

事象の瞳

複写眼

千里眼

―魔法―

複写眼のおかげで一度見た魔法ならなんでも使うことが出来る。

他の設定はそのうち追加します。

## 第一話 出会い

――麻帆良学園――

SIDE???

今少女の周りには軽く100は越すんじゃないかって位の鬼共がいる。

少女は鬼を睨み付けたままうごかない。

そんな中十匹位の鬼が大剣を振り上げて少女に突っ込む。

「つく・・・！氷爆」

横薙ぎに振るわれた剣を少女はしゃがむ事で避け、そのままバックステップで三メートルほど離れてから鬼共に魔法薬を投げつけて氷漬けにする少女。

もし、ここに普通の人がいたら『映画の撮影・・・？』などと思ってしまうことだろう。

無理もない。

なぜなら100匹を越す鬼に囲まれているのは、学生服に身を包んだ10歳くらいの少女なのだから。

これほどシニールな現場は映画くらいしか思いつかないだろう。

少女はまた鬼共を睨み付けたまま動かない。  
あたりを沈黙が包み込む。

ふいに鬼が口を開いた。

「なあ・・・譲ちゃん・・・ワイらも暇やないんや、いつまでも譲ちゃんの手相手してるワケにはイカンのや。」

「黙れ。」

少女は鬼を睨みつけながら呟く。

「今なら見逃してやるで？」

「その口を閉じる・・・ゲスが!!」  
そう言つて少女は鬼に突っ込んでゆく。

「はあ・・・死んでも堪忍な譲ちゃん。」

少女は鬼の顔面にけりを放つが、少女の胴廻りよりも太い腕で簡単に防がれてしまう。

そのまま鬼は少女の足を掴み近くにある木に叩きつける。

「つつつ!」

叩きつけられた肺から空気と血が同時に吐き出され呼吸もままならず、

少女はそのまま地面に落ちた。

少女は痛みでまともに動くことの出来ない体に鞭打つて木に寄りかかりながらも立ち上がり、鬼を見上げるそして見上げた先には

「譲ちゃん・・・恨まんといてな。」

剣を頭上に掲げる鬼の姿があった。

「終わりや!!」

鬼の剣が少女に迫ってゆく。

少女は咄嗟に目を閉じる。

.....?

おかしい.....痛みがない？

不思議に思って少女は閉じていた目を見開く。

そこには《穴》から出てくる人の姿あった。

SIDE シヴァ

暗い穴の中をしばらく歩いていたら前の方から光が差し込んで来た。

「あつ！出口……かな？」

次はどんな世界かな  
平和な世界がいいなあ

とか、思いつつ穴から出た、すると……

あら不思議！周りに怖い顔したお兄さん達がありますよ……

……

……

……

……

……

「はあ……」

また変な世界に来ちゃったのかな……僕って運なさ過ぎ……

まあ今さら自分の運について嘆いても仕方がないので、  
目の前にいる怖い顔した人にここがどこか聞いてみることにした。

「あのお〜ここどk」なんじゃワレエ!!」・・・。」

聞こうとしたらいきなりドスの効いた声で怒鳴られた。

人の話は最後まで聞こうよ・・・ていうか初対面の人に向かっていきなり怒鳴るかな〜普通。

っあ!きつと初対面の人にいきなり話しかけられてビックリしちゃったんだよ・・・。

うん!そうだ!そうに違いない!僕だつて知らない人にいきなり声かけられたらビックリするもん!ていうか怖いもん!

そうと決まればこっちが怪しい者じゃなつて事を証明しなくちゃね。

「え〜つとぼくは別に怪しいm」貴様!何者だ!!」・・・。」

今度は後ろから怒鳴られた。

今度はさつきみたいなのドスの効いた声じゃなくて可愛い女の子の声で怒鳴られた。

気になつて後ろを振り返つてみると傷だらけの女の子がいた。

「あのお〜・・・大丈夫?」

「当たり前だ!私を誰だと思つてる!?!」

いや・・・誰だと思つてるって言われても・・・初対面の人  
事知つてるワケないじゃん。

よし!ここは正直に答えよう!

「君の事は誰だとも思つてます」そんな事はどうでもいい!」っ  
て、ええ!?!」

どうでもいいって……自分から聞いてきたのに……酷いよ……。

「オイ！貴様！もし私を助ける気があるなら目の前の鬼共をどうにかしろ！」

この子初対面の人に向かっていきなり命令口調だよ……。まあ、この状況を見る限りさつきまでこの怖い人達がこの子を襲っていたのは間違いないさそうだし、助けてあげないと男が廃るってもんでしょ！……。

ていうかここについているいる聞かなくちゃならないし、アツチの怖い人よりコツチの子の方が話易そうだからってというのが本音です。

「まあ……後で僕の質問に答えてくれるならいいよ？」

「ああ、質問などこいつらを倒せたらいくらでも答えてやるさ！」

「交渉成立だね。」

「いいからさつさとしろ！」

「はいはい。」

そこで僕は怖い人たちの方に向き直り一言忠告をする。

「あゝ、その人達死にたくなかったら、今すぐ逃げてね。」

「笑かすな小僧！それはこっちの台詞や……！」

そう言つて一気に怖い人たちが僕に突っ込んで来た。  
って事は死んでもいいってことだよな？

そして僕はバックステップで怖い人達から一旦離れ、全員が自分の  
視界にはいる位置まで行き、全員を視界に入れながら一言



凶  
が  
れ

刹那、全てが終わった。





## 第一話 出会い（後書き）

なんとなく主人公のイメージが変わっちゃった気がします。

あと『凶がれ』というセリフを聞くと空の境界のあの子の事を思い出してブルーな気持ちになってしまいます。

## 第二話 出会い2

SIDEエヴァ

な・・・なんだ今のは・・・。

私は今見たものが信じられなかった。

私の前の男が一言『凶がれ』と言った瞬間、あの軽く1000匹は居そうな鬼共全てが

『ねじ凶がった』のだ。

信じられん・・・今の一撃で全ての鬼が還ったぞ！

しかも今のは明らかに魔法では無かったし、魔力すら感じなかったぞ！

いきなり現れるわ、ワケのわからん能力使っわ・・・本当に何なんだコイツは！

そんな風に私が物思いにふけっていると、ふいに男が私の方を振り向いて口を開いた。

なにを言われるのかと思いきや私が身構えると男は一言

「そつえば・・・君の名前ってなに？」

「……………」

私は思わず気の抜けた声を出してしまった。

S I D E    シヴァ

怖い人達の片付けも終わったし、次はあの子にこの世界の話を知るか……などと考えていたら重要な事を思い出した。

僕まだあの子の名前知らないじゃん。

と、言う事で僕はあの子の方を向いて名前を聞いてみることにした。

「そっいえば……君の名前ってなに？」と、

するとこの子は

「は？・・・・・・・・・・・・・・・・」

などと気の抜けた声を出した。

「いや・・・・・・・・。。『は？』じゃなくてさ・・・名前だよ、な・ま・え分かる？」

「当たり前だ！自分の名前が分からないワケないだろうが！」

また怒鳴られた！？・・・・・・・・なんでこの世界の人はすぐ怒鳴るのかなあ？・・・・・・・・謎だ。

「まあまあ、とにかく落ち着いて君の名前を教えてください？」

「あ、ああ・・・そうだったな、私の名前はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ。」

エヴァンジェリン・・・・・・・・か。

エヴァでいいかな？

「じゃあ君の事は今度からエヴァって呼ぶね」

「あ、ああ・・・いいぞ・・・所で貴様の名は？」

「っあ！・・・・・・・・そういえばまだ僕の名前教えてなかったんだっけ。」

「僕の名前はシヴァ・アレース・ジ・カイン・・・・・・・・シヴァって呼んでね。」

「分かった・・・今度からはそう呼ばせてもらう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・  
・・・所でシヴァ、さっきのは何だ？」

「さっきのって？」

「だから、さっきのヤツだ！」

「だから、さっきのつて？」

「あの鬼共をねじ凶げたやつだ！」

ああ・・・アレね・・・。

「アレは『歪曲の魔眼』つて言つて、視界内の任意の場所に回転軸を作り、対象の強度に関係なく“凶げる”事の出来る魔眼だよ。」

僕がそう説明するとエヴァは目を見開いて物凄い勢いで僕に詰め寄つて来た。

「なに！？・・・対象の強度に関係なく“凶げる”つて・・・ソレ最強じゃないか！？」

「べ、別にそうでもないよ、目をなんらかの方法で潰されたら終わりだし、視界に入らない所に居る敵には役に立たないからね・・・。」

眼前に迫るエヴァに若干引き気味になりながらもちゃんと説明した。

まあ、僕は千里眼も持つてるから視界に入らない所に居る敵も“凶げる”事が出来るけど、

それはまだ言わないで置こう。

「ま、・・・まあ僕の事は置いて、あの人達倒したんだからちゃんと僕の質問に答えてもらおうよ？」

イカンイカン僕とした事が危うく本当の目的を忘れる所だった。

「いいだろう・・・まあ、もともとそういう条件だったしな・・・」  
つお！・・・案外素直な子じゃないか。最初からこんな風だったら  
もつと話もスムーズに進んだのになあ・・・  
・・・。

兎も角！この世界の情報を集めなくちゃなにも始まらないので

「じゃあまず始めに・・・ここどこ？」  
と、聞いてみた。

すると、

「はあ！？・・・何を言ってるんだ貴様？ここは麻帆良学園に決  
まってるだろ？」

いや・・・何言ってるんだコイツ？みたいな目で見られても・・・

「いやあ、実はさ・・・僕さっきこの世界に来たばかりで何も知ら  
ないんだよね・・・。」

「なに！？・・・ソレはどういう意味だ！！詳しく説明しろ！！」

「どういう意味って・・・そのままの意味だよ。」

「だからソレがどういう意味か」「マスター探しました」・・・って。  
・茶々丸！？」

なんか僕とエヴァが話してたら空から女の子が降りてきた。  
ていうか・・・誰？

「どうしてお前がここに!？」

「どうしても何も、マスターを迎えにきただけですが？」

なんかエヴァと親しそうだな……

「ねえエヴァ……その子誰?……」

「ああ……コイツは私の従者の茶々丸だ。」

「よろしくお願いします。」

と言ってペコリと頭を下げる茶々丸さん。

「こちらこそよろしく茶々丸さん……所でエヴァになんか用があつて迎えに来たんじゃ無かつたの？」

「そうでした……マスター、学園長がお呼びです。」

「ジジイが?……まったくいつも呼び出してばっかで……たまには自分で来ればいいものを……」

と、心底嫌そうな（とゆるかメンドくさそうな）顔して呟くエヴァ。

「まあ、いいだろう調度コイツをジジイに紹介しなくちゃいけないか  
つたしな。」

「え?……僕を？」

「ああそうだ……貴様は一樣この学園の侵入者だから……  
当たり前だろ？」

何言ってるんだコイツ？・・・みたいな目で見てくるエヴァ。  
いや・・・、当たり前だろ？って言われても困るんだけど・・・。  
とか考えていると、

「おい貴様さつさと着いて来い！」

いつの間にかエヴァ達が100メートル位先まで行っていた・・・。  
・・・っていつの間に!?

「つちよ!?!?・・・待ってよ・・・置いてかないで!。」



第二話 出会い2（後書き）

なんか眠くて文章が変に……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8780i/>

---

彼の瞳に映る世界

2010年10月11日01時04分発行